

「まことの礼拝」を考える

——新型コロナウイルス禍の産物

立山 忠浩

- | | | | |
|---|--------------|---|-----------|
| 一 | コロナ禍による礼拝休止 | 二 | 礼拝を「問う」試み |
| 三 | まことの礼拝を考えるとは | 四 | み言葉と聖餐 |
| 五 | 一人の礼拝が成り立つのか | 六 | ルターの聖書講義 |
| 七 | ルターの原点、源流 | | |

一 コロナ禍による礼拝休止

筆者の牧会する教会は、新型コロナウイルス感染者急増により日本政府から緊急事態宣言が出されたことを受け、通常の主日礼拝を休止する措置を執った。日本福音ルーテル教会（以降はJELCと記す）の多くの教会も

同様であり、総会議長談話にも呼応する対応となった。通常礼拝だけでなく、教会学校も週日の聖書を学ぶ会なども休止した。これまでに体験したことのない事態に直面することになった。

この措置は二〇二〇年三月末から始まり、六月中旬までの三か月ほど続いた。この間、教会学校の礼拝説教と共に（信徒による説教を中心として）、牧師の説教もホームページで日曜日ごとに掲載し、更新を続けた。六月二一日からは礼拝が再開された。と言っても、礼拝式文は歌わず、讃美歌も小声に留め、聖餐式は執行しないという限定的な再開であった。当然のことながら、公共交通機関を利用する会員の多くが、礼拝への出席はしばらく慎重であった。再開後も依然として礼拝に集えない会員に配慮して、説教の更新は現在も継続されている。

礼拝を再開しても集えない会員からしばしば耳にする声があった。「申し訳ない」という言葉に代表されるお詫びの声である。その理由を薄々想像しながらも、さらに会話を進める中で分かって来たことがあった。礼拝の時間になると聖書を開き、讃美歌を歌い、祈りを献げ、そしてホームページに掲載される説教を読まれている方がほとんどであった。つまり、ひとりで、あるいは夫婦で礼拝の時を自宅で持っているのである。日曜日ごとに礼拝献金を献げ、教会での礼拝に集えることになった暁には、それを持参しようと準備されている方々がほとんどであった。なのに詫びるのである。

詫びることは、日本人特有の謙遜さや自己卑下の文化、慣習に起因するのかもしれない。しかしそれだけだろうか。ここに「礼拝とは何か」、いや「まことの礼拝とは何か」という問いが浮かび上がるように思う。つまり、ひとりで行う祈りや讃美、そして説教を読むことは（説教を聞くことも）、教会で行われる礼拝と比べて不完全なもの、あるいは劣るものという理解があるのではないだろうか。それは正しい礼拝理解なのだろうか、こ

れが筆者の問いである。

この問いは、この度の新型コロナウイルスというこれまで体験したことのない災禍から浮かび上がったことである。しかし実は、以前から牧会の現場で生じていたはずの問いであったことに気づく。例えば家族だけの礼拝を行うことがある。家庭集会での礼拝もある。牧会の現場では、聖餐用具を持って病室や家庭を訪問することもある。この礼拝は教会の礼拝堂で行われる礼拝よりも不完全で、劣るものだろうか。いや、もっと広げれば、少人数で行われる礼拝は、大きな会堂に多くの会衆が集う礼拝に比べて劣るものなのだろうか。あるいは説教だけの礼拝は、聖餐式を伴う礼拝に比べて不完全で劣るのだろうか。

このような問いに対して、きっと多くの教職者が「どちらも同じ礼拝である」と答えるに違いない。しかし実際は、多くの会衆と共に集う礼拝が優れた礼拝である、礼拝式文をきちんと用いる礼拝の方が正しい礼拝である、説教だけの礼拝は聖餐式を伴う礼拝の方に比べて不完全である、そういう思いを内に抱いているのではないだろうか。

ゆえに本小論の目的は、これらを改めて問い直すことにある。いや、「考える」という言葉が相応しいかもしれないが、そこから導き出される結論の根拠を示すという試みでもある。

二 礼拝を「問う」試み

1 主の日と礼拝の場所

JELCは、この度の新型コロナウイルス感染の脅威を憂慮し、総会議長談話（二〇二〇・三・二六）によって全国の教会に通常礼拝の一时的な休止を強く勧めた。政府の緊急事態宣言を重く受け止めての談話であったが、各個教会の対応はそれぞれの判断に委ねた。筆者の属する東教区では、多くの教会がこの勧めに沿う対応を講じた。緊急かつ臨時的な措置とはいえ、前例のない勧めには当然根拠となるものが必要である。議長の談話の一部が以下である。

日本福音ルーテル教会は、神の御言に聴く「神奉仕としての礼拝」を大切にしてきました。しかしルター自身は、『ガラテヤ書大講解』や『大教理問答』の中で、これを律法的に理解することは戒めています。「主の日」も「礼拝」も、時と場所を限定するものではありません。注意深く言う必要があるでしょうが、私たちはそれを律法的に「不要不急なもの」であるとは理解していません。「すべての命（いのち）」を守る観点から私たちは、状況に柔軟に対処し、譲ることができるところは譲ってゆく賢明さを持っています。よって今後、感染拡大が見込まれる地域では、「礼拝」の公開の中止を積極的に選択することが求められるべきと考えます。オンラインという非公開のかたちで礼拝を守り続けることができる教会は、ぜひそれを実施し続

けて下さい。

談話の主旨は「主の日」も「礼拝」も時と場所を限定するものではないことを喚起し、通常礼拝を休止し、他の礼拝方式の検討を勧めることである。その根拠として挙げたのがマルティン・ルターの著書『ガラテヤ書大講解』と『大教理問答』であった。主の日を日曜日と限定することは「安息日を覚えてこれを聖とせよ」という十戒の第三戒を律法主義的に解釈することであり、それはユダヤ人のように時間に縛られていることに他ならないとルターは指摘している。ゆえに主の日の礼拝は日曜日に拘る必要はなく、自由に選択できるというのである。

礼拝する場所もこれと同様の理解をしている。『大教理問答』によれば「こうした休息日に、礼拝を守るべき場所と時を定めて、集まり会し、神のことはをきき、みことばについて語り、神をほめ、歌い、祈りをささげる」⁽¹⁾ことは、ユダヤ人的な律法に縛られた理解だと書かれている。もうひとつの『ガラテヤ大講解・下』も同様に「われわれは主の日を守り、主の降誕、復活日、その他同じような祝日を守るが、全く自由にこれを守っている」⁽²⁾とし、日曜日だけを「主の日」と限定することを戒めている。

このように主の日を自由に定め、礼拝する場所も特定の礼拝堂に縛られる必要がないことをルターの著書から確認できる。これが談話の、いつもの礼拝を休止し、別の礼拝様式で行うことが許されると勧めたことの根拠である。

しかし我々の興味の射程はここに終わらない。『大教理問答』は続けて「けれども民衆はそれを守ることができないので、一週のうち少なくとも一日をそのために選びわたることが必要である。ところが、昔から日曜日が

そのために定められているのであるから、やはりその習慣はそのままにして、しきたりどおりに行い、だれでも無用な改革によって混乱をひきおこさないようにしなければならない⁽³⁾」と言う。ここでのルターの主意は、主の日を日曜日に限定することを戒めながらも、無用な混乱を引き起こすことを避けるように、これまでの習慣やしきたりを尊重することを勧めることにある。こうなると、主の日を日曜日に定めることを否定しているのか、あるいは推奨しているのかの判断に迷いが生じるが、要は、原理・原則論を語りながら、実際にはこれまで通りに、主の日を日曜日とすることを奨励していると解するべきであろう。とすれば、談話の根拠が十分ではないように思えて来る。

『ガラテヤ大講解・下』も同様である。確かにここで「主の日を守り、……全く自由を守っている」と言っているが「主の日を守り」とは、日曜日の礼拝のことを指していると言うよりは「主の降誕、復活日、その他の同じような祝日⁽⁴⁾」の礼拝のことである。これは前後の叙述から明らかである。さらにこの項目の解説の終わりは、父祖たちがこれらの祝日を（ここに主の日も含めているが）守るために定めたのは「民衆が特定の日と時にみことばを聞くために集まってきて、神を知ることを学び、聖餐にあずかり、あらゆる必要のために共に祈り、また、霊的、身体的な神の祝福に対して神に感謝するために守るのである⁽⁵⁾」と言っている。儀式的に、形式的に祝日を守るのではなく、明瞭な目的があるからこそ守るのであって、そのために特定の場所に集まって来ることを指摘することが主旨である。

議長談話で引用された『ガラテヤ書大講解』と『大教理問答』の共通点は、その一文あるいは一語から判断するならば、主日を日曜日に縛る必要がないことや礼拝堂という特定の場所に限定しなくてもよいという根拠にな

りうることである。まさに自由さが担保されている箇所と確かに言えよう。しかし全文の解説を解釈するならば、ルターの執筆の意図はそれではない。

このように検討を重ねた目的は、議長談話の齟齬をいたずらに指摘することではない。未曾有の緊急事態に対応するために、通常の礼拝の休止を勧めるための根拠をルターの著書に探し求めたご苦労を覚える者のひとりである。ゆえに、代表的なルターの著書の一文から根拠づけようとしたことも十分に理解できよう。しかし、実際にルターの著書を確認するならば、談話の根拠が必ずしも十分でないことが浮かび上がってくる。いや、ルターの著書に根拠を求めることを問われなければならないのではないか、これが我々の問題意識である。

このように言うことは、ルター派に属する者にとっては理解しがたいことであろう。我々にとって、神学なこと、信仰や聖書の解釈などを論じるときには、常々ルターを筆頭に宗教改革者たちの著書や神学を尋ね求め、それを論拠としているからである。言うに及ばず、それを否定しているのではない。ルター派の遺産を礎とし、前提とすることは当然のことであり、それに異論を挟む余地はない。しかしながら、今日の様々な問題や出来事に関するすべてのことを、五〇〇年前の宗教改革者たちに答えを求めること自体の限界と困難さを指摘したいのである。

この度の新型コロナウイルスを端にした諸問題に対応する根拠を、ルターの著書に求めなければならない事態が確かに生じた。緊急の、そして具体的な対応が求められた。無論、多くの示唆が与えられる言葉がある。今日の問題にも力強い根拠となるルターの教えや言葉が目に残まることも事実である。例えば、ルターの時代にはペストが猛威を振るった。新型コロナウイルスどころではない災禍であったであろう。そこでルターがどう対応

し、何を語ったのか、それが確認できる。ルターの残した手紙は今日においても極めて有益であり、力強い⁽⁶⁾。

しかしながら、そのパスト禍にあつてルターが手紙等で書き残していることは、礼拝の休止に関することではない。明らかに礼拝の休止の根拠をテーマとしているのではない。ひとりで礼拝することの是非などでもない。まして「まことの礼拝」を論じているのではない。

三 まことの礼拝を考えると

1 原点、源流に返る

「まことの礼拝を考える」とは、礼拝学や典礼学を問うという意味ではない。そのような神学についての専門的知識は筆者にはないし、それ自体を問うことに興味はない。例えば、礼拝は旧約聖書の時代に始まり、それが新約聖書の世界に継続され、ユダヤ教の礼拝とは異なる伸展を遂げて行く。さらに初代教会から中世までの発展があり、それが宗教改革に至ってカトリックとは異なる独自の礼拝論が確立して行つた。そういう意味の礼拝論や礼拝学は今後もさらに発展して行くであろう。そのひとつがエキュメニカル運動に啓発された礼拝学であるように思われる。カトリックや聖公会の礼拝とルーテル教会のそれとに左程の違いを感じないのは筆者だけではない。主日ごとに読まれる聖書の箇所はほぼ同じであり、カトリックや聖公会との洗礼の相互承認も交わされており、未だに高い壁が存在するとはいえず、聖餐についても継続的な課題であることは共通認識である。

このように、礼拝学や典礼学の神学的発展を考慮せずに「まことの礼拝を考える」と言うことに、どれほどの意義があるのか、それ自体が問われなければならないことかもしれない。ただこの小論が目的とすることは、礼拝論、典礼論の発展を検証することではない。礼拝の原点、源流とでも言うべきことを問うことである。なぜか。原点や源流というものは、それが進展し、発展する中でしばしば忘れ去られ、軽視されるからである。いやもっと核心的な言い方をすれば、伸展と発展したことの方が貴いものであり、原点や源流というものがあたかも過去の遺物にでもなったかのように受け取られがちである。不完全で、未完成なものとなることがほとんどだからである。だから、原点や源流の意味と価値が極めて過小評価されてしまっていることを問うのである。

ルターを中心とした宗教改革はいったい何であつただろうか。原点主義、源流主義ではなかつたろうか。常に聖書に立ち返り、殊にも福音書とパウロ書簡の言葉に立ち返ることであり、それがすべてを言い尽くしていることへの偉大な発見であつた。ルターの著作も聖書への立ち返りであり、その言葉からの解釈でしかなかったことを忘れてはならない。

2 義認論と信仰義認論

ルター派にとつての最も代表的な義認論がそうであり、また聖餐論も同様であつた。「義認論」というルター派の「ひとつの不可欠の基準」「基準の唯一の重要性」という教理は、ガラテヤ書、ローマ書を中心としたパウロの言葉の解釈から生まれたものであつた。パウロの原点、源流に立つ時に、当時のカトリック教会において完

成されたと思われた教理、神学が裝飾品を重ねているように見えたのである。当時の贖宥状に代表される金銭や人の功德で救いを獲得できるかのような教えがその最も悪しき教理の例であったが、それをルターは、ただ聖書の言葉を持ち出すことで論駁しようとした。

ところが、ルター派の「義認論」はいつの間にか「信仰義認論」というものへと姿を変えて発展して行くことにもなった。「キリストを信じる信仰によって義とされる」(ローマ三22、ガラテヤ二16など)というパウロの言葉を根拠にしたが、それが人の「信仰」によって義とされるという「私の信仰」を根拠とする義認論が定着してしまうことになった。もちろん「受動的な義」や「(神の)恵みのみ」「恩寵による義」という表現を堅持したが、しかし「キリストを信じる信仰によって義とされる」とルターがドイツ語へ翻訳したことが、結果として「私の信仰」を強調することになってしまったことは否定できない。⁽⁸⁾

そうではなく、「キリストの〈まこと〉」によって義とされるという読み方に拘る者がいる。⁽⁹⁾それがルター本来の「義認論」ではないかと問うたのである。そして二〇一八年に刊行された『聖書協会共同訳』では「キリストを信じる信仰」が「キリストの真実」に改訳された。他教派でこれがどのように評価されているのか知らないが、我々ルター派にとっては極めて大きな問いが投げかけられることになった。これもパウロの原点・源流に返ることで、本来の義認論を呼び覚まさせることになった。結果、これまでの「信仰義認論」を問うことにつながった。

聖餐論においても同様である。カトリックとの論争において、またその後のスイス改革派たちとの論争においても、さらに展開されるフィリップ派と呼ばれた同労者メランヒトンの影響を受けた同じルター派との論争にお

いても、ルターの聖書の言葉へのこだわりは特筆に値する。最後の晩餐の時のイエスの言葉であり、聖餐の設定辞の言葉となった「これはわたしのからだである」の「である」に、これほど拘泥する宗教改革者はいない。このイエスの一言に拘るがゆえに、それを論拠づけるためにルターは属性の交流や遍在論という独特の用語を持ち出した。それが成功したのかどうかは評価の分かれるところであるが、見逃していけないことは、ここにルターの原点主義、源流主義というものを見ることができることである。

聖餐論争は実に複雑で、宗教改革者内でも最もデリケートな論争となつて行くが、重要なことは、イエスの言葉の「である」にルター派の聖餐論が凝縮されているということである。そこを出発点として進展し、発展した聖餐論や礼拝論、典礼論というものは、この原点によって支えられていることを忘れてはいけない。

四 み言葉と聖餐

聖餐と説教の関係についても触れておこう。今日のルター派の礼拝理解は、日本福音ルーテル教会と日本ルーテル教団の共同委員会の「日本福音ルーテル教会式文委員会」から出された「主日礼拝式文試用版」^⑩に表現されていると言えよう。この題名は『主日礼拝式文』・『御言葉の礼拝』である。『主日礼拝式文』とは聖餐式を伴う礼拝の式文のことで、『御言葉の礼拝』とは聖餐式のない、いわゆる説教だけの礼拝式文のことである。

「主日礼拝式文（御言葉の礼拝）」で解説されていることであるが、例えば、毎週聖餐式を取り行うことがル

ターの時代は当然のことであり、それがルターの本意であつたことが説明されている。さらに、後の合理主義によつてルター派の毎週聖餐式を行う習慣が失われたという歴史的経緯の解説も施されている。ここからも、今日のルター派教会の礼拝式の流れが「失われた礼拝形式の回復」であり、それが聖餐式の毎週の執行の奨励へと向かつていることが理解される。

今回の式文改訂の試みにおいて、「御言葉の礼拝」がどのように評価され、また位置づけられるのか記されていないが、文脈から読み取るならば、「聖餐を伴わない『御言葉の礼拝』を伝統として築いていたプロテスタントのグループ」への配慮が伺える。また、今日のエキュメニカル運動の流れからすれば、カトリックや聖公会の礼拝論、すなわち礼拝とは必ず聖餐を伴うものであるという神学に呼応しているのであろう。

上述したが、筆者は礼拝学や典礼学の専門家ではないが、ただルターの「聖餐論」に興味を持ち、常々彼や宗教改革者たちの著作に関心を抱いている立場から、み言葉・説教と聖餐の関係について述べたいと思う。

1 聖礼典とみ言葉

ルター派の礼拝理解を語る時に必ず引用されるのが『アウグスブルク信仰告白』の第七条の「教会について」であるが、前半に記されている「唯一の聖なるキリスト教会は、つねに存在し、存続すべきである。それは、全信徒の集まりであつて、その中で福音が純粹に説教され、聖礼典が福音に従つて与えられる⁽¹⁾」という文言がそれである。教会理解がいつの間にか「礼拝論」へと展開されることになった。しかも「福音が説教され、聖礼典が

福音に従って与えられる」という言葉が、「説教と聖礼典」の二つが礼拝の中心であることを教えている根拠として引用されることが多い。もともと、筆者も基本的にはそのように理解している者の一人でもあるが、「説教と聖餐」がここでは問題となる。

人は自説を展開し、補強し、根拠づけるために、重要で権威ある文書や言葉、文献というものを引用する。さらに言えば、自説に適う一文や文言を選び出すのである。第七条の「教会について」もその一例である。言い方を変えれば、持説にそぐわない文言に目を留めることが軽視されがちである。

例えば、説教と聖餐（聖礼典）に関することで『アウグスブルク信仰告白』第五条はこう書いている。「神は福音と聖礼典を与える説教の職務を設定された」と。「福音と聖礼典」を並列し、それを与えるものとしての説教が記されている。やや不明瞭な印象は否めないが、しかしここで重要なことは、聖礼典のひとつである聖餐を与えるものとしての説教が強調されていることである。⁽¹²⁾ 聖餐と説教を併置しているのではない。第七条の前の第五条で、牧師の職務として第一に「説教職」を位置付けているのである。敢えて言えば、聖餐よりも説教に力点がある。これが原点であり、源流ではなからうか。

2 ルターの著書から

ルターの聖餐に関する著作でもこの傾向は顕著であり、それ以下に確認できる。

『会衆の礼拝式について、およびミサと聖餐の原則』では、「まず第一に、キリスト者の会衆は、どんなに短

くても神の言葉が説教され、祈りが捧げられるものでなければ、集まるべきではない⁽¹³⁾」と言っている。つまり、礼拝には説教が不可欠であり、これが「第一」に位置づけされているが、『アウグスブルク信仰』第五条に沿っている。

それに対し聖餐理解は少し異なる。「不可欠」とか「第一」という理解はない。もちろんどうでもいいという意味ではない。ルターの聖餐へのこだわりは大きかった。カトリックとの間で、またプロテスタント内において、そして同じルター派内での論争でも一番激しかったのは聖餐論争であったが、その中心にルターがいた。しかし礼拝における説教と聖餐の位置づけは異なる。説教ほどのこだわりがあったとは思われない。

例えば、「毎日のミサはことごとく廃止すべきである。なぜなら、御言葉についていえば、ミサについては何もないからである。……日曜日のミサと夕祷の歌は残そう。……けれども人々はそれを減らしたり増やしたりするであろう⁽¹⁴⁾」と言う。聖餐は重要だけれども、それは「減らしたり増やしたり」という具合に自由なものであり、逆に言えば礼拝において「不可欠」とは言っていない。また『アウグスブルク信仰』第二四条の「ミサについて」でも「祝祭日に、あるいはまたほかの日にも、陪餐者が出席しているとき、ミサが守られ、それを望む者は聖餐にあずかる⁽¹⁵⁾」とあり、聖餐に与ることの自由な選択肢を認めている。これは「どんなに短くても神の言葉が説教される」という礼拝における説教理解とは明らかに温度差がある。

3 聖餐とみ言葉

ルターの聖餐に関する叙述で目を引く言葉がもうひとつある。聖餐とみ言葉の関係であるが、み言葉とはイエス・キリストの語られた設定辞のことを指す。ルターが聖餐で「み言葉」という場合には、多くが「これはわたしのからだである」という設定辞である。その「み言葉」はしばしば「説教」という言葉と同義語で語られることがある。ルター特有の感性、ひらめきであるが、思い付きという批判にもなりうる表現である。

み言葉と説教の区別はそこにはなく、また使い分けの説明もルターはしない。例えば、「説教において、『これはあなたがたのために与えられた私のからだである。……』などのサクラメントのことばを、十分強調することである」と言い、あるいは「説教において、『これはあなたがたのために与えられた私のからだである。……』などのサクラメントのことばを、十分強調することである^⑬」とも語っている。さらに加えるならば、「もし説教がなかったならば、キリストは決してミサを設定されなかったであろう。彼はしるしよりも、もっと御言を重要視された。なぜなら、説教は、キリストが『これはわたしのからだである。……』と言われ、ミサを設定された、その御言を説明するものにほかならないからである。全福音は、この契約を宣言すること以外の何であろうか^⑭」とまで強調している。これらの言葉からも明らかのように、ルターは設定辞を説教という言い方をし、あるいは説教の使命を「設定辞を語り、その御言を説明することだ^⑮」としている。

もうひとつの重要なことは、聖餐の要素である「パンとぶどう酒」とみ言葉の関係である。次の言葉には驚きを禁じ得ない。

ミサにおいては、御言とパンおよびぶどう酒がある。御言は神の誓約であり、約束であり、契約である。し

るしはサクラメントである。すなわち、聖なるしるしである。そして、契約がサクラメントよりもはるかにたいせつであるように、しるしよりも御言が、はるかにたいせつである。なぜなら、しるしは、もし人が御言をもつてさえいれば、なくてもさしつかえない。したがって、サクラメントなしでも救われるだろう。もし私が、ただ契約、すなわちキリストの言と誓いを、自分の心に銘じ、それに対する私の信仰を養い強めさえすれば、私は、ミサにおけるサクラメントを毎日味わうことができる⁽¹⁸⁾。

しるしであるサクラメント、すなわちパンとぶどう酒は、「もし人が御言をもつてさえいれば、なくてもさしつかえない」とまで言っている。もちろん聖餐は不要という意味ではなからうが、み言葉の重要さと偉大さと比べるならば、パンとぶどう酒も、いや聖餐というサクラメントさえもルターにとっては霞んでいる。それほど設定辞に、すなわちキリストの言葉に重きを置くルターの聖餐理解を、我々はどれほど認識しているだろうか。

だからさらに「このことば（設定辞）は、サクラメントの要素よりも千倍も大切だからである」と言うことができたし、また「私たちの教えは、パンとぶどう酒とが役に立つのではなく、無論また、パンとぶどう酒の中のからだと血とが役に立つことではないのである。もつと進んだ話をしよう。十字架上のキリストとそのいっさいの苦難と死も、何の役に立つことではない。あなたがたが教えているように、たとえば、極めて熱心に、極めて心を込めて、これを認識し、心にかけても、どうしてもそこにもう一つのほかのものがなくてはならないのである。いったいそれは何だといわれるのか。御言である。御言である。御言である⁽²⁰⁾」と衝撃的なことまで言っている。

「十字架上のキリストとそのいつさいの苦難と死も、何の役に立つことではない」とまで言うようなルターの過激な表現は、他にもしばしば見られるものではある。ユダヤ人やトルコ人に対する激しい表現もそのひとつであるが、これはルター自身の個性に留まらず、この時代の他の人々の文章にも見られる表現のひとつである。これを文字通り受け取る必要はないが、しかしここまでで共通していることは「み言葉」の極端なまでの強調である。サクラメントよりも、パンとぶどう酒というしるしよりも、キリストの言葉が重要である。それを語る説教は千倍も大切なのであると受け取るべきであろう。この意味することは大きい。

4 聖餐の回数

礼拝における聖餐の回数はどうなるのか。これまでの考察で凡そ明白であろう。

上述したが、ルターに回数の拘りはない。自由なものである。言い方を変えれば、礼拝において説教は不可欠なものであっても、聖餐はそうではない。繰り返すが、「しるしは、もし人が御言をもつてさえいれば、なくてもさしつかえない。したがって、サクラメントなしでも救われるだろう。もし私が、ただ契約、すなわちキリストの言と誓いを、自分の心に銘じ、それに対する私の信仰を養い強めさえすれば、私は、ミサにおけるサクラメントを毎日味わうことができる」と言うほどルターは大胆である。

また『二種陪餐について』では、「サクラメンを望む人々が出席して、ミサを願うとき以外は、全く何のミサも行われるべきではないのである。そして、そのようなミサは、一週に一回、あるいは一月に一回行われたらよ

い」⁽²²⁾と具体的に指針を与えている。ここには聖餐を伴う礼拝だけを「主日礼拝」と呼ぶ理解は成り立たない。聖餐がなくとも「主日礼拝」である。このことは「主日礼拝式文試用版」にも「聖餐を伴わない主日礼拝式文『御言葉の礼拝』を選択肢とする」と解説されているが、表紙の『主日礼拝式文』・『御言葉の礼拝』という題名にそれが反映されていることを察することは難しい。いや、誤解を生むように筆者には思われる。このことを明確にするためには、『主日礼拝式文（聖餐を伴う礼拝）』と『主日礼拝式文（聖餐を伴わない礼拝）』と、聖餐を伴わない礼拝も『主日礼拝式文』と同様に明記すべきであろう。

五 一人の礼拝が成り立つのか

さてここまで、聖餐を伴う礼拝と説教だけの礼拝について論じて来たが、本小論の狙いは「まことの礼拝」を問うことであつた。それも自宅における一人あるいは少数人数での礼拝行為である。讃美歌を歌い、祈り、また聖書を読み、説教を聞く（あるいは読む）などの礼拝行為を行うことが「礼拝」と言えるのか、という問いである。さらに言えば、それを礼拝と呼んだとしても、大勢の会衆が集い、日曜日の午前中に礼拝堂で行われているような礼拝に比べれば不完全であり、不十分であり、劣るようなものなのかという問いであつた。

この問いに対する答えを見出すために我々ルター派の牧師が発想することは、ルター著作や宗教改革者たちの礼拝理解を足掛かりにしようとするのであろう。あるいは神学校で学んだ礼拝学や組織神学、歴史神学とい

うものを頼りにしようとする。これに沿ってルターの著書にひとつの答えを見出すことは可能である。ルターはこう言うからである。

聴衆がいないのに教職者が公の礼拝で御言葉を宣べたり、岩石や樹木の間で、また野外で、ただ自分に向けて呼びかけたりするほど御言の奉仕が愚かになるのは全く不合理なことであるように、もし、御言の役者が、食べたり飲んだりする客がだれもないときに公の主の晩餐を準備し執行すれば、また、他の人々に仕えねばならぬ者たちがだれもない食卓や広間で食べたり飲んだりするとすれば、これは最もまちがったことである。⁽²⁾

これは会衆のいないところでの公の礼拝が成り立たないことに言及している。聖餐も同様である。ルター派の牧師には、カトリックの司祭がひとりでもミサを行うことを真似て聖餐を執行する者はいないはずだが、ルターの言葉はそのようなことを事実上禁じていることになる。

この度の新型コロナウイルス禍で、実際にいくつものルーテル教会で講じられた対応のひとつが、インターネットによる説教の配信であった。日曜日の礼拝時間になるとネット配信するカメラの前に立ち、自分以外に誰もいない礼拝堂で説教した牧師もいた。これは「(礼拝堂に)聴衆がいないのに教職者が公の礼拝で御言葉を宣べた」という行為に当てはまるが、五〇〇年前のルターの時代には想定されていない事態の中での対応である。礼拝堂には聴衆はいないが、配信される説教を聴く聴衆が距離を隔てた向こう側にいる。だから「聴衆がいない

のに」ということには当てはまらないが、かと言って同じ礼拝堂には聴衆がいけないことには変わらない。礼拝出席者としてどのような数え方をするのかなど、現代の機器を用いての礼拝に付随する検討すべきことは意外に多いことに気づかされる。

ただ、我々の課題はこのことではない。礼拝堂に集うことが許されず、またそこに足を運ぶことができない信仰者が、例えば自宅で、あるいは病室や施設で、ひとりで礼拝を行うことの意味と意義である。このことの答えを、例えば今挙げたルターの著作から見出すことはできない。「聴衆がいけないのに……」とは公の礼拝のことであり、また「御言葉を宣べたり」とは教職者が無聴衆の中で説教することを想定しているに過ぎないからである。結論を急げば、そもそも我々の問いをルターは想定してはいないのであり、問いの答えを彼の著作や説教の中から見つけ出そうとすることは困難と言うべきである。

議長談話もそうであったが、今日生じていることの神学的な課題を、五〇〇年前の中世の終わりに生きたルターの著作に直結する答えを求めることがそもそも難しい。ルターの神学的著作や説教はその時代やその地域の必然性の中で、いわば限定された中で語られていることを認識しなければならない。

ではどこに糸口を見出せば良いのであろうか。それは宗教改革の原点に立ち返ることである。み言葉、すなわち聖書に立ち返ることである。礼拝に関することも同様である。しかも礼拝に関する聖書の箇所をルターがどう解釈したのか、それが糸口となる。

ただ我々の狙いは、ここにルターの礼拝に関する著書や説教を提示することではない。ルターの聖書注解や説教も、その時代と状況の中で執筆され語られたこと、つまり限界性を持っていることをも念頭において読まな

ればならないことを我々は確認した。

既に論じたことであるが、ルターの「信仰義認」の根拠とした『ローマ書講義』『ガラテヤ大講解』がそうであった。ルターの講解に返ることでは十分ではなかった。本来のパウロの「義認論」に返ることが重要であり、それは我々自身が直接パウロの手紙へと向かわなければならぬことを意味する。このことが次に確認されよう。

六 ルターの聖書講義

我々の狙いである「ひとりの礼拝」、あるいは「まことの礼拝」というべきことに答えを与える箇所は旧約聖書には多いが、新約聖書には意外と少ない。

「焼き尽くす献げ物をささげる」という行為を礼拝の原点とみなすなら、アブラハムが息子イサクを燔祭として献げようとした出来事（創世記二二13）や石の記念碑に油を注いだヤコブの行為（同二八18）などから、礼拝の始まりを旧約聖書に見出すことができる。彼らはひとりの礼拝を行っている。新約聖書では、サマリアの女を巡る出来事（ヨハネ四1）が真つ先に目に留まることになる。以下が我々の主題に示唆を与える箇所である。

婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山（ゲリシム山）でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝し

ている。救いはユダヤ人から来るからだ。しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって (ᾠδὴ τῷ κυρίῳ καὶ ἀληθείᾳ) 父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。(ヨハネ四21—24)

これほど明瞭に「まことの礼拝」を語っている箇所は他にない。しかもイエスの他にはサマリアの女ひとりしかない。礼拝の場所と時間に縛られることは、ゲリジム山とエルサレムの神殿の宗教行為と重なっている。イエスは、サマリアの女が持っていた固定観念を否定し解放しようとするが、それは「まことの礼拝」に目覚めることへの誘いであった。

「まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である」をどう解釈するか、それが重要な鍵である。この解釈を巡って、ルターと並ぶ代表的宗教改革者であるジャン・カルヴァンの注解は以下である。

「神への真の礼拝は霊のうちにある、というのである。そこから、どんな場所でも、しかるべく神に仕え、神を礼拝することができることになる。……それというのも、神はこの飾り気のない単純な礼拝をよろこぶと聞く時、わたしたちはなにをおそれることがあるだろうか。教皇派のひとたちは、この奉仕がおびたらしい儀式にふくらまされていないからといって、軽蔑している。……霊とまことのうちに神に仕えること

がどのようなことか、あきらかである。すなわち、古い様々な儀式のおおいを剥ぎとり、神への奉仕においてただ霊的なものをだけを保存する、というのである。それというのも、神的な奉仕の真理は、霊のうちに成立するものであり、さまざまな儀式は、いわばよそからつけ加えられたものだからである。また、次のことも注意しなければならない。まことという語が用いられているのは、虚偽と比較するためではなく、律法のもとでの象徴の外面的な付属物と比較するためである、と。だから、まことは、霊的な奉仕で純粹で單純な本質なのである。²⁴

カルヴァンは「神への真の礼拝」「純粹で單純な本質」という言葉を用いている。この意味することは何であろうか。これはまことの礼拝の「必要不可欠」を指しているのではないだろうか。言い方を変えれば、このことを踏まえるならば、それは「まことの礼拝」になるという意味であろう。

ここで我々が問題としなければならないのは「ひとりの礼拝」である。カルヴァンはそれについては解説を施していない。しかし筆者は、イエスと対面し、イエスの言葉を耳にしている女がひとりであったことに注目すべきだと考える。ひとりの礼拝である。霊と真理のもとに、その中で、女はイエスとの対話をひとりで行っている。これをカルヴァは「飾り気のない單純な礼拝」と言う。イエスによってそこに招かれている。それがまことの礼拝を体験している「その時」であり「今」ではないだろうか。

ある教職者は、このように解釈すると、「別に教会の礼拝に集わなくていいのだ」「家でひとりで礼拝すれば十分である」という怠惰な信仰と教会生活を肯定させ、それを助長してしまうことを危惧するかもしれない。確か

に安易な解釈は思わぬ方向への道を拓き、しかも安価な恵みへの道筋を作り出すことになりかねない。

しかしながら、サマリアの女の境遇を考えてみよう。多くの解釈者が指摘することだが、炎天下の時間帯にわざわざ水を汲みに来ることは通常では考えられないことであった。「正午ごろのことである」(四六)と福音記者があえて記しているのはそれを暗示する。しかし、この女はあえてこの時間帯に水を汲みに来たのであれば、何らかの事情があったのであろう。人目を避けざるを得ない境遇をここに察することができよう。

転じれば、人々が集う礼拝の場所と時間帯に来られない者たちの境遇を慮っていると解釈することできるのではなかろうか。怠けて、寝過ごしして礼拝を休むことがあろう。面倒くさいとか、教会の礼拝に魅力を感じないなどの理由を付けて礼拝を休む者もいよう。だが、サマリアの女をそのような状況に当てはめることはできない。

さらには、礼拝に集うことを願いながら、それが叶わない者がいる。コロナ禍で公共交通機関を利用することに恐怖を感じて家に留まり、ひとりで礼拝する者がそれに当たる。病院や施設で暮らさざるを得ない者がいれば、家からひとりで外出できない者もいる。そのようなやむを得ない事情のゆえに、礼拝に集おうと願っても現実が許さない境遇がある。サマリアの女をそのような者たちに重ねるのは曲解であらうか。

たとえひとりであっても、「霊と真理をもって父を礼拝する」のであれば、それは「まことの礼拝」を体現し、神の恵みに与っていると言うべきではないか。具体的に考えるならば、それぞれの境遇の中で、聖書に聞き、讃美と祈りを唱えることになろう。そこに牧師の説教を加えることもできよう。それを霊と真理の中で、それに信頼し、そこに身を委ねて行うのである。それでは不十分とか本物の礼拝ではないということは決してない。必要不可欠のものを満たしているからである。言うまでもなく、それは教会で礼拝に与っている者にも敷衍

されることである。

ひとりの礼拝は教会の礼拝に比べると不十分だけれども、牧会的な配慮で「それも礼拝ですよ」と励ますという意味でもない。サマリアの女の出来事が「まことの礼拝」の原点を教えている、このことを明確に伝えること、これがこのコロナ禍での牧会者の声ではないだろうか。

サマリアの女はイエスと出会い、まことの礼拝を体験した後に、人目を避けた女から人々にイエスを伝える証し人に変えられて行く（ヨハネ四39）。共同体のひとりとしての歩みが回復するのであるが、これがこの出来事のひとつの帰着点である。いつもそこに至るという意味ではなかるうが、まことの礼拝を体験する者が、それぞれの証し人として用いられて行くことを見逃していけない。

七 ルターの原点、源流

問題はルターである。ルターの聖書講義、説教はおびただしい量にのぼるが、ある特徴を持っている。カルヴァンが組織的に、整然とすべての聖書註解を満遍なく、しかも偏りなく残しているのに対し、ルターは実にむらつきが多い。福音書に限って言えば、マタイによる福音書が圧倒的に多く、その次がヨハネ、ルカという順になる。マルコによる福音書などはマタイによる福音書に比べると僅かである。新約聖書の重要度の順序付けを行ったことから分かるように、一時期ではあるが、ヤコブの手紙やヨハネの黙示録を新約聖書から除外しよう

としたほどである。逆に、福音書でもヨハネ福音書を最も優れた書と位置づけ、使徒書ではローマ書とペトロの手紙一を「真実の中核または精髓」と呼んだ。

問題のヨハネによる福音書の説教であるが、繰り返し選ばれた箇所があれば、残されていない章節も散在する。サマリアの女の箇所は後者に当たるとする。説教も講義も存在しない。つまり、我々が「ルターに聞く」を試みようとしてもそれは不可能を意味する。

ルターは、福音に関することや義認に関することなどの、彼自身にとつての重要な意義を持つ箇所は実に丁寧に、繰り返し力を込めて執筆し、また語っている。時代の要請に応えたと言っている。しかし、問題意識の対象とならないことは除外されることが珍しくない。サマリアの女の記事がそうである。「まことの礼拝」や「ひとりの礼拝」などということに意識は向いていない。これは何を意味するのだろうか。

我々は、「ルターに聞く」「ルターに返る」ということで解決しない今日的、現実的な問題があることを知らなければならぬ。我々はこれからもルターに聞き、ルターに返ることを基本とするが、それだけでは十分ではない。それどころか、義認論に関するものでは、むしろルターに問うことをしなければならないことを指摘したい。いや、ルターに聞き、ルターに返るという意味は、ルター自身の原点、源流と言うべきことに向かうということと理解すべきであろう。それは「御言である。御言である」というルター自身の言葉からも確認できる。ルターに頼れないのであれば、我々自身で聖書の言葉に向かわなければならない。

ルターは二一歳で修道院に入り、それから八年後にヴィッテンベルク大学で聖書講義を担当することになった。準備のために自身で聖書に向い、解釈しなければならなかった。詩編（一一一三年）を皮切りにし、ローマ

書（一五一五年）、ガラテヤ書（一五一六年）の講義が続くが、その準備の過程で聖書の真理を掴み、その確信は確固たるものになっていた。それが「塔の体験」と呼ばれるものである。み言葉が彼を捕らえて離さなかった。その体験から時を移さずして宗教改革が起こり、以降激しい論争に直面することになるが、ルターの論拠は聖書の言葉であり、自分が掴んだみ言葉の福音的な解釈であった。これがルターの原点であり、源流である。

残されているルターの説教や講解、著作というものは、その時代と脈略の中で語られ、執筆されたものである。当然のことながら、今日の問題の中には、ルターの視座にはないことも存在している。そのひとつが「まことの礼拝」や「ひとりの礼拝」というものである。とすれば、我々自身がルターの原理、源流に帰り、聖書を読み、解釈することによってその答えを見出さなければならぬことは明白である。

注

- (1) WA 30/L 144. 「大教理問答」『ルーテル教会信条集《一致信条書》』聖文舎、一九八二年、五五四頁。
- (2) WA 40/L 623. 「ガラテア大講解・下」『ルター著作集』第二集12巻、徳善義和訳、聖文舎、一九八六年、一七五頁。大柴譲治議長談話に関しては、柳下明子氏の「日本のプロテスタント教会のパンデミック対応を考える」(『聖書と神学』三一号、日本聖書神学校キリスト教研究所、二〇二〇年に所収)が参考になる。
- (3) 前掲書、五五四頁。
- (4) 前掲書、一七五頁。
- (5) 前掲書、一七六頁。
- (6) T・G・タツバート編『ルターの慰めと励ましの手紙』内海望訳、リトン、二〇〇六年、二八七頁以下を参照。
- (7) 『義認の教理に関する共同宣言』ルーテル／ローマ・カトリック共同委員会訳、教文館、二〇〇四年、三三頁。
- (8) 例えば太田修司「ガラテヤ書における『イエス・キリストの信実』」『日本の聖書学』1号、一九九五年、一二四頁
や田川建三訳著『新約聖書 訳と註 3』作品社、二〇〇七年、一六八頁を参照。
- (9) 『小川修 パウロ書簡講義録』(一)、リトン、二〇一一年)を参照。
- (10) 「主日礼拝式文試用版」の使用がJELCでは二〇一八年の全国総会で承認された。一〇年後の二〇二八年に全国総会での承認を得て、正式に採用されることになっている。ゆえにこの期間は暫定期間であり、諸課題の積極的な議論と検討がなされることが望まれている。
- (11) BSLK S61. 「アウグスブルク信仰告白」『ルーテル教会信条集《一致信条書》』三八頁。最近別訳を目にしたが、原文は以下であり、本訳が正確である。(ein heilige christliche Kirche) welche ist die Versammlung aller Glaubigen, bei welchen das Evangelium rein gepredigt und die heiligen Sakrament lauts des Evangelii gereicht werden.

- (12) グラーネは第五条の本文「福音と聖礼典を与える説教の職務」を「福音を説教し、聖礼典を与える職務」(Leih Grane, *Die Confessio Augustana*, 1970, S.46) と言ひ換えて解説している。ここから第七条との整合性を図っていることが察せられるが、『教会のバビロン虜囚について』の「司祭の職責は、説教である」(『ルター著作集』第一集3巻、聖文舎、一九六九年、三三二頁)を引用する際には「第一の(司祭の職責)」という言葉を挿入して説教職の優先を認めている(同上S.34)。
- (13) WA 12, 35.「会衆の礼拝式について、及びミサと聖餐の原則」(一五二三年)『ルター著作集』第一集5巻、聖文舎、一九六七年、二七五頁。
- (14) 同上、二七八頁。
- (15) 前掲書、七七頁。
- (16) WA 10/II, 29.「二種陪餐について」(一五二二年)『ルター著作集』第一集5巻、六三頁。
- (17) WA 6, 373f.「新しい契約、すなわち聖なるミサについての説教」(一五二〇年)『ルター著作集』第一集2巻、聖文舎、一九六三年、一七七頁。
- (18) WA 6, 363. 同上、一五九頁。
- (19) WA 10/II, 29.「二種陪餐について」六四頁。
- (20) WA 18, 202.「天来の預言者らを駁す、聖像とサクラメントについて」(一五二五年)『ルター著作集』第一集6巻、聖文舎、一九六三年、二六九―二七〇頁。
- (21) 拙論「ルターとユダヤ人問題」『教会と宣教』二三号、日本福音ルーテル教会東教区・宣教ビジョンセンター紀要、二〇一七年所収を参照。
- (22) WA 10/II, 31.「二種陪餐について」六六頁。
- (23) WA 12, 215.「会衆の礼拝式について、及びミサと聖餐の原則」二九三頁。

(24) カルヴァン『新約聖書註解Ⅲ』（ヨハネ福音書・上）山本功訳、新教出版社、一九六三年、一三一頁以下。